

日本に生まれ、大学入学まで一度も日本以外で生活をしたことのなかった私にとって、今回の留学が初めての「海外で長期間生活をする」という体験であった。いうまでもないことではあるが、およそ半年間のこの生活の中では、事前に予想していたよりは日本社会との隔たりが大きくなかった経験、全く予想もしていないところで異文化に足を掬われた経験など、思い出すだけであつという間に時間が過ぎてしまうほどの多様な体験をした。この欄をお借りして、自分なりに振り返る中で印象に残ったいくつかの出来事を記述していきたい。

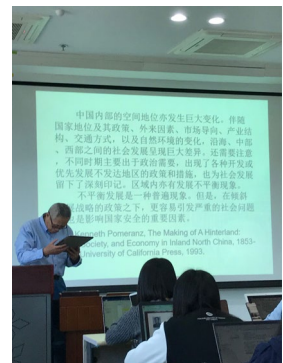
私が記述する内容は大きく分けて 2 点である。受講した授業に関してや、学生生活、大学の環境についてなどが 1 点、そして実際に中国での生活を通して私が感じたこと、発見したことなどを中心にまとめたものが 1 点である。

まずは、受講した講義について、箇条書きで列挙する。

- ①【中国アフリカ関係(中非关系)/国際関係学部(国際関係学院)/月 5・6/中国語/20 人程度】
- ②【中国ソ連関係(中苏关系)/国際関係学部(国際関係学院)/火 5・6/中国語/60 人程度】
- ③【中国現代社会史(中国現代社会史)/社会科学院(社会科学院)/水 5・6/中国語/60 人程度】
- ④【中国メディア社会論(Chinese Media and Society)/社会科学院(社会科学院)/木 5・6/英語/20 人程度】

続いて、受講した科目についての所見を詳述する。私自身の半年間の振り返りとなるため、お読みいただくのに骨が折れることになるかもしれないことを初めにお断りしておく。

まずは①について。この授業は、私が受講した授業の中で、北京に到着してから一番始めに出席した授業であり、なおかつ最も少人数の授業であった。初回の授業において先生から、全員に自己紹介と受講の理由を話すように求められたとき、緊張に胸がはち切れそうな思いになったことを今でも記憶している。結局私は英語でスピーチを行うことで自己の肝の小ささとチャレンジ精神の欠落に対してひどく落胆したのであったが、同時に、クラスに出席していた数名の留学生が皆、流暢な中国語を話すことに舌を巻いたのであった。開始早々いきなり落ちこぼれになってしまった私に対してでさえ、優しい笑顔と励ましの言葉を忘れなかった許教授に対しては敬愛の念が絶えなかった。「良き師の元、良き徒集う」の例に洩れず、この授業に出席していた学生たちはみな好奇心旺盛であり、自らの学術的見識を広めることに余念のない人々であった。中国アフリカ関係を専門とする許先生は、同時に留学生の国籍(すなわち私を含む日本からの留学生、もう 1 カ国はアメリカからの留学生)を意識した授業展開となっており、非常に興味深く感じられるのみならず、積極的に授業に参加する意思を継続させるに十分な内容であった。



↑北京大学の一般的な授業風景

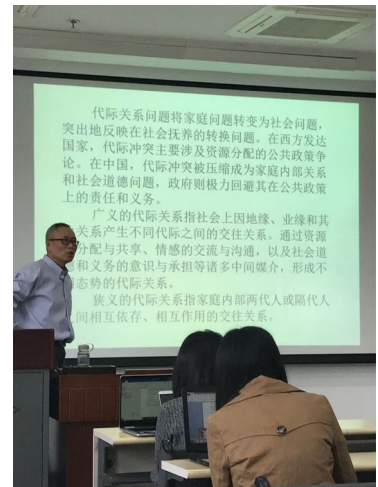
続いて②について。これは、私が最も興味を持っていた授業内容であり、なおかつ授業を通してこの分野に関してさらに造詣が深まったとも言える授業であった。1917 年のロシア革命を経て帝政を打倒するという名目の元で形成されたソビエト連邦。1912 年の、清王朝を打倒する目的で開始された辛亥革命に端を発する全国的な革命運動の終着点として誕生した中華人民共和国。この二カ国は、共に社会主義的国家運営の元で共産主義社会の確立を目指すという人類史的命題に立ち向かいながらも、時に一方が他方に盲目的に傾倒する時代であり、時に全世界を二分する規模で相互が対立を展開したりするというように、他に類を見ないほど複雑な二国間関係を形成していた。東京大学においてこの分野を学習していた私は、しかしながら依然として存在する確固たる”壁”の存在を意識せざるを余儀なくされていたことを今でも覚えている。この”壁”というのは、自らがこの二カ国関係の当事者ではなく、あくまで外部からの視点という枠組みに固定されなければならないという不自由さを比喩したものである。今回北京大学に留学した理由の一つに、中国とソ連・ロシアの関係、またこの両国が世界に与える影響、さらに絞って特定すれば東アジア地域の外交的安定に寄与する影響に関して、北京大学において専門的に学習したかったという

理由がある。そのような目的意識を持って北京に降り立った私にとって、この講義はまさに盲亀の浮木ともいえるほどに運命的な出会いの元で巡り会えた授業であった。本来であればこの講義の内容がどのようなものであり、指導教員である項先生が複雑怪奇極まるこの両国関係を如何に捉え、如何に教授したかということについて詳細に記述したいところではあるが、限定された字数のために説明を省略せざるを得ないことを遺憾に思う。

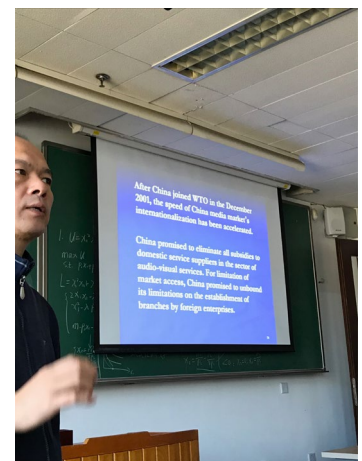
そして③について。この授業は辛亥革命以降の中国社会が、どのような変革を遂げてきたかという点に主軸をおくものである。一口に中国社会といっても、その内容は主体・客体共に、凄まじいまでの多様性を秘めている。主体の例を挙げると、最も顕著なものは都市部と農村との差異、圧倒的多数派を占める漢民族と少数民族との間の溝など、それにとどまらずさらに都市部の中においても戸籍に由来する所得格差とその居住分布の問題など、枚挙にいとまがない。一方の客体はといえば、これもまた多様である。講義においてはまず時間認識の概念から開始し、科学技術の発展とその流入に伴う生活の変化が社会認識にどのような影響を与えたのかという分析対象へと変化していく。息を呑むまでに鮮やかなほどめまぐるしく変化していく講義の対象項目はまさに多種多様であり、受講する学生をして退屈させないどころか、授業の開始が待ち遠しくさせるほど魅力的なものであった。

最後に④について。この授業は、私が最も力を入れて臨んだ授業であった。この授業は、各国からの留学生が集まるという授業の性格はさることながら、その内容に関しても、香港での博士課程取得経験のある中国人教授が、現代中国の抱える諸問題をメディアと絡めて弁証的に分析するという、中国社会を深く知ろうとする人間にとってこれほど望ましい授業はないともいえる充実した内容であった。この授業においては、積極的に発言をし、次回の授業に向けた予習に関しても余念がなかったこともあり、講師である陳教授と非常に懇意にすることができたのは、今回の北京留学における最も重要な収穫の一つといっても過言ではない。陳先生は、現代中国の権力構造を、メディアという時として”第4の権力”と呼ばれる切り口から分析し、それを全世界に向けて発信することでその名を馳せた、中国における学術的権威に分類される方である。このように先見の明があり、なおかつグローバルな視点で事象を分析し、その研究成果をワールドワイドに発信していくことで世界に貢献してきた教授の元で学習することができたのは、これから彼と同じように世界を独自の切り口で捉え、その考え方をあまねく世界に伝えるという夢を持つ私にとって、非常に大きな喜びであった。具体的な授業内容に関しては以下の通りである。すなわち、中国国外に居住しその国のメディア報道に日常的に触れる人々が知る中国と、中国本土に住む人々が認識し受容する中国メディアの報道内容との差異について詳細に分析し、そこから現代中国の抱える優越的特点と、時として問題として認識される特徴について考察するという内容である。この授業においては殊に、外部からの視点を元に事情を分析する姿勢が欠かせないため、毎回授業の冒頭に各国の留学生に自国メディアと中国メディアの同一事件に対する報道の差異を説明させるのみならず、教授と親交の深い中国メディアを長年観察してきたスイスからの論客を招いて客員授業を行うなど、斬新な手法が満載であった。このような、留学生自身に対して自国と中国の報道姿勢に関する差異を説明をさせるという場面において、私が積極的に発言をしたことは言うに及ばない。このような発言を通して、欧米文化圏からすると差異があまり際立たないと感じられる日本と中国という二国間の、しかしながら同時に厳然として存在する社会的事象に対する報道の姿勢の差異を、広範の対象者に顕在化することができると思ったからである。

末筆に、全ての授業への私個人に対する評価を記そうと思う。①について。中国語の授業の中で最も授業に参画した自負がある。少人数授業であったため積極的な参画を余儀なくされたという事情を差し引いても、素晴らしい教授法を用いて自らの研究分野を学生に伝えようという姿勢を強く打ち出してきた先生に、心から尊敬の念を禁じ得なかったからである。一点の曇りがあるとすれば、最終プレゼンであった研



↑中国の伝統的家庭観と社会学との関連についての講義



自らの研究分野について専心的に熱弁する陳先生↑

究報告の場に出席しなかったことである。これは、自らの中国語能力の至らなさを恥じた上で、初めて当講義において欠席という選択肢を選択した故であるが、全てが終わった今となっては講じる手が他にあったかもしれないと悔やむばかりである。②について。授業内容は申し分なく興味深いものであり、最後まで授業についていくことができた。最終的な評価がどのようなものになるかはわからないが、高評価であることを期待したい。③について。授業のフォローアップという観点に立って言えばこれほど思索を巡らして下さる先生はいらっしゃらないと思う。そのおかげもあってか、自分も最後までついていくことができた。評価が高いものであることを望むが、例え低いものであったとしても全力を尽くした科目であることから、自分の中で改善すべきだった点や後悔などはほとんど思い浮かばない。④に関してであるが、何よりもまず第一に、自分のできることを成し遂げたという感想が浮かぶ。教授と私の間に強い関係が築けたことのみならず、教授が課した課題に対して「日本の視点を通して見た中国」という極めて主観的要素の強い内容を織り交ぜた形で答えることができたからである。

続いて、中国での生活を通して私が感じたこと、発見したことなど、興味深く感じられた経験について記述する。

まずは、「常識を疑う」という体験について。ここでいう「常識」とは、「日本社会で生まれ育った人間であれば誰もが当たり前だと考える文化的思考の様式」とでも言い換えることができるだろうか。すなわち「家に入る時は靴を脱ぐ」や、「湯船に浸かる前に身体を洗う」など、「他の文化的背景を持つ社会においてはほとんど役に立たないものの特定の社会においては誰もが身につけていることを求められるルール」のことである。上記の2例のようなものであれば、私も渡航を開始する前から意識することはできていたが、渡航後に感じたのはこの「常識」が、自らの気づくことができない領域まで根を下ろしている、ということであった。

昨年のものであったが、女人禁制とされる土俵上で倒れた急病人を救うために、救命活動を行える女性が土俵に登った事件が話題となった。「土俵を降りて」と呼びかけた場内アナウンスに対してそれを擁護する論調が国内では見られたものの、その考え方が国外で波紋を広げた、とされる出来事である。当時の私は、この出来事が先に述べた「常識」の理解における対立であると考えただけで、一方でなぜ国外世論がこの「他者の常識」を理解できないのか、理解しようしないのか、不思議に思っていた。それから半年ほど経った10月の北京で、私はある興味深い出来事に会った。多くの人知っている通り、中国人は一般に食事に際して箸を用いる。そのために、日中の食文化の相似点を強調する日本人は多いように思われる。しかしながら当然、異なる点もあることを思い知らされた。食事の際に違う料理を頼んだ中国人の友人が、私に一口分を渡すために、箸から箸への受け渡し、いわゆる「合わせ箸」を平然と要求してきたのである。箸文化圏において箸の使用法の禁忌に差異があるなど思いもよらなかった私、そして幼い頃から同じ食べ物をふた組の箸で同時に触ってはいけないと教わってきた私にとって、この出来事は日中間の文化的相違を顕在化したのみならず、「常識」の持つ意味合いについて深く考えさせられることであった。日本社会で生活していた自分にとっては当たり前であり、仮におこなってしまえば大人としての人格を疑われかねない「合わせ箸」。これを、自分と顔立ちに際立った差異もなく、食事に際して自分と同じように日常的に箸を使用する友人が、平然とやってのけたのである。このことは、「常識」の普遍的ではないことを強く私に知らしめた。そして同時に、冒頭の「土俵事件」に思いが至った。あれは、国外世論が日本の「常識」を理解する努力を行ってのことでは全くなかった。「どの社会でも一律に機能する訳ではなくあくまで特定社会においてのみ効力を持つ『常識』」が、「全世界で普遍的に最も重要なものであるはずの人命、そしてその救助という行為」に優先された、ということを経験から指摘されていたのである。

ここにおいて初めて、私は自らの見識の浅薄さと、他者の意見に耳を傾けその主張を理解する努力を怠っていた自らの惰性を恥じ入るに至った。それと同時に、この新たな経験が、自らの人生をより豊かにするであろうこと、多くの人に伝えるべき体験であることに気づいたのである。

続いては、中国語についての考察である。国外で生活するにあたり最も苦しめられ、なおかつ愛着を持つことになったのが言語、すなわち中国語である。ここでは私の出会った経験を元にして、外国語を学習する意義、他者に物事を伝えることの本質について考察してみたい。

ここで考えるのは、世界レベルで進展するグローバル化と、「国際語」となりつつある英語との関係についてである。少し難しめのイシューを掲げてしまったが、述べたいことは極めて簡潔であり、それは「自国で暮らす人間が英語を喋れる必要があるのか」という点である。昨今の日本国内における英会話教室など



の勧誘コピーとして「東京オリンピックに向けて英語で道案内ができるように」というような内容のものがあるが、この風潮に関して私が北京で考えたことを述べたい。以下、順を追って述懐するので、論が長じて恐縮ではあるがお付き合いいただきたい。まず、北京留学中の私がよく問われた質問として「北京の人は英語が喋れるの?」というものがある。これに対する私の返答は「北京大学に在学している学生は英語が非常に堪能であるが、市井の人々の中には中年層より上の世代を中心に英語が話せない人も沢山おり、むしろ多数派である」という説明である。かかる状況にあつて、大学の外におけるコミュニケーションは当然中国語を使用することになる。しかしながら同時に、私の中国語能力も制約があり、北京の人々が圧倒的な速さでまくし立てる中国語を理解できないことが多々あった。というより理解できないことの方が多かった。そんな時、私が中国人ではないことを理解した彼らは、特に若年層を中心に英語でのコミュニケーションを試みるが、相手方の発音能力並びに当方の聞き取り能力相互の欠如によりうまくいかないことがほとんどである。留学してまだ日の浅かった私はコミュニケーションが成り立たないことに深く落胆し、日々強いストレスにさらされる中で生活を余儀なくされた。これに対して、半年の生活を通して見つけ出した解決策は、携帯を使用して漢字を媒介としたコミュニケーションを行う、そしてゆっくり簡単に中国語を喋ってもらう、ということであった。前者に関しては別の問題もあるため、ここでは後者に関して説明したい。ゆっくり簡単に中国語を喋る。一見、母語話者であれば誰でもできそうに思われるこの作業が、実は非常に難易度の高い作業であることを私が知ったのは、11月も半ばになってからであった。パソコン部品を購入するために北京市内中心部にあるアップルストアへ赴いた私は、スタッフの喋る中国語が非常に聞き取りやすいことに衝撃を受け、その理由を考察した。結論としては、彼らは①ゆっくり丁寧に発音する②簡単な語彙を使用する③省略を行わないという3点を忠実に遵守していたのだった。というよりも海外店舗への赴任経験があるアップルストアの店員は、どのようにすれば外国語として勉強している人間がその言語の聞き取りを行いやすくなるかということ、自身の経験を踏まえて独自に体得していたのであった。以上の3点を端的に例示し、この報告書をお読みくださる方の便宜を図るため日本語に置き換えてみると、以下の通りである。すなわち「保証期間と耐用年数が短い部品であることを説明した上で顧客に購入してもらうことを説得する」という文脈で、「こちらの製品、ちょっとほしょー短いすけど、耐用年数もっすけど、いいすか。」ではなく、「これは、保証期間が短いです。使える時間も短いです。いいですか?」ということである。下半身のストレッチを実践する場面においては「膝間接を屈折し大腿四頭筋を弛緩させ、そして足関節も同様に」ではなく、「ひざをまげて、太ももを伸ばしましょう。そして足首も伸ばしましょう」となるだろう。訪日外国人の何割が日本語学習経験があるのか定かではないけれども、少なくとも日本語を学習中の外国人に対しては、「お互いに母語ではなく発音にも自信がない言語」を用いた会話よりも、「母語話者が学習者のためにゆっくり丁寧にわかりやすく話す」方が、コミュニケーションの円滑さという面においてはよっぽど有効性があると私は考える。現に、北京の人々と最終的に意思疎通ができたのは、お互いに支離滅裂な英語を用いてよりも、私は辿々しくも相手がゆっくり丁寧に中国語を用いた会話であったからである。会話が成り立たないときは、支離滅裂な英語を使うのではなく、簡単な中国語をゆっくり話してほしい、このように何度も感じた私はその必要性をここに強く主張したい。そしてこのような会話の仕方は、たとえ母語話者といえども訓練が必要であり、それこそが外国語教育よりも母語教育を優先させるべしと解く論客の伝えんとすることなのではないだろうか、と北京の空の下で思うのであった。

最後に、外部から観察した日本社会の特徴についてである。ある特定の社会が持つ特徴には、社会構成員の生活をより円滑にするために有益なものや無益なものがあることは言を俟たない。ここでは、日本社会の持つ後者の特徴の中で、近年特に問題視される女性の社会的役割について論じたい。

経済協力開発機構の調査によると、出産後の女性の就業率に関して日本はかなり低い割合となっており、2015年の時点で正社員比率でわずか8%となっている。一方で、中国においては50%を超える値となっている。実際に、中国人学生の認識においては、日本の大学生とは比較にならないほど、男女を問わず大学院進学への希望が強く、結婚・就職を経てもなお就業を継続することを望む学生が多い印象を受ける。もっともこの現象に関しては、社会構造や所得傾向など学生の意識の他に影響を与える因子も多くあり、一概に論じることはできない。しかしながら、それでもなお、男女を問わず強い社会的向上心を持ち合わせた同年代の異国の学生と机を並べた経験は非常に意義深く、この場で述べる必要があることを強く感じた。

もう一つ、女性に関して論じたいことがある。それは、女性の声の低さである。非常に主観的な認識の問題であり、中国社会の総体を分析する営みにつなげるのは至難の技かもしれない。しかしながら、であるからこそ、この試みは独自性を持つものであり、考察するに値すると感じ、この場で述べる次第である。

「女性の声が低い」。これは、あくまで私個人が中国に滞在して感じた感想の一つであり、それ自体にはいかなる意味も付随しないかのように思われるかもしれない。しかしながら、この半年間で考察した私の所見を説明することで、この現象の中に社会的意義を見出してみようと思う。まずは、声の高さを決定する主な要因についてであるが、①声帯や咽喉など先天的決定される身体的条件や、発生時の心理状態②声の高さが他者に与えるイメージの2点に集約されると思われる。このうち、前者に関しては発話者が意識的な対策を講じることが不可能であり、ここで問題になるのは後者である。日本社会においては、特に大学進学前の私が置かれていた環境を振り返ってみると、周囲の女性が高周波数の音域を意識的に選択していたことが興味深かったことを思い出す。特に、場面において音域の選択を恣意的に行なっており、例えば同性である女友達と会話するとき、異性である男友達と会話するとき、より親しい関係である交際中の男性と会話するとき、そして家庭内においてと、いずれの場合においてもそれぞれ適応する発話音域を持ち使い分けている友人に舌を巻いたことを今でも鮮明に記憶している。翻って、北京留学中についてである。幸いにして、一人の女性が上記4パターンの環境全てにいるところを目撃した事例がいくつかあった。いずれの女性においても、用語の選択や発話のピッチ等に変化が見られたものの、音域の選択を行う例に遭遇することはなかった。たった半年間のわずかな経験をもとに総合化することの危険性は十分認識しているつもりであるが、日本社会の構成員、特に男性構成員が「女性の声の高さ」に高い優先度を与えているという傾向は、少なくとも中国社会と比較して一定の説得力を持つということができるといえるが、私の結論である。

以上、およそ半年間の留学期間における気づきを、様々な角度から分析するという形で論じた。この報告書をお読みいただいている方には、駄文をお読みいただいて汗顔の至りである。乱文乱筆をお許しいただければ幸いである。